

外来野生動物等による新たな農林被害防止技術の開発

1 中核機関・研究総括者

独立行政法人森林総合研究所・小泉 透

2 研究期間

2006～2008 年度（3 年間）

3 研究目的

外来野生動物による農業被害、ニホンジカによる壮高齢人工林剥皮被害など新たな農林被害に早急な対策が求められている。このため、加害動物の生物学的特性を応用し動物被害に対応した経営方式を確立することにより、被害防止効果を長期に持続させる技術を開発する。

4 研究内容及び実施体制

- ① 動物インパクト低減のための技術基盤の確立（埼玉県農林総合研究センター、兵庫県立人と自然の博物館、日本獣医生命科学大学獣医学部、麻布大学獣医学部、岐阜大学応用生物科学部、(株)野生動物保護管理事務所）

捕獲個体の分析から個体群動態学的特性を、飼育個体および野生個体の行動解析から基礎的な行動特性や行動生態を明らかにする。

- ② 農地被害の軽減技術の開発（北海道大学文学部、(独)農業・食品産業技術総合研究機構近畿中国四国農業研究センター、NPO 法人 EnVision 環境保全事務所）

農地側の防御能力を高めるために、加害動物の生物学的特性を応用した具体的な被害軽減技術を開発し、その効果を検証する。

- ③ 被害リスクに対応した経営管理技術の開発（福岡県森林林業技術センター、熊本県林業研究指導所、(独)森林総合研究所、(独)林木育種センター）

ニホンジカによる人工林剥皮害の発生要因を解明するとともに、被害軽減方法の開発、その発生予測を行い、被害地における森林造成技術を確立する。

5 目標とする成果

外来野生動物等による被害に対して効果が持続する防除技術が開発される。これにより、今後さらに新たな被害が発生した場合の被害対処方法をマニュアル化することができる。

外来野生動物等による新たな農林被害防止技術の開発

野生動物による新たな農林被害の発生

新たな農林被害とは？

近年被害量が急激に増加している
被害に関わる基本的な知見に乏しい
過去の取り組み事例が少なく、技術の蓄積に乏しい

アライグマ



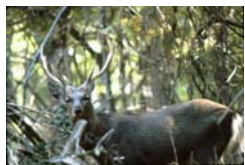
ハクビシン



ヌートリア



外来野生動物による農業被害



ニホンジカによる剥皮害

生産者に不安と不満が増大
生産意欲の減退が懸念される

研究内容

動物インパクト軽減のための技術基盤の確立

捕殺個体を用いた個体群特性の解明
GISを用いた分布拡大過程のシミュレーション
飼育実験による行動特性の解明

農地被害軽減技術の開発

効率的な捕獲装置の開発
効果の高い防護柵の開発

被害リスクに対応した経営管理技術の開発

被害発生の予測
被害防除の低コスト化
被害を受けにくい品種の導入

達成目標

被害発生地における効率的・持続的な被害
防止技術の確立

期待される波及効果

予測に基づく先行防除と防止技術の移転